

平成25年度採択プログラム 事後評価調査

博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表。ただし、項目13については非公表]

機関名	京都大学	整理番号	U04
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) やまぎわ じゅいち 氏名・職名 山極 壽一 (京都大学総長)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) きたの まさお 氏名・職名 北野 正雄 (京都大学理事・副学長)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) まつざわ てつろう 氏名・職名 松沢 哲郎(京都大学高等研究院・特別教授)		
4. 類型	U <オンリーワン型>		
5.	プログラム名称	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院	
	英語名称	Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science	
	副題	人間とそれ以外の動物を対象とした地球社会の調和ある共存	
6. 授与する博士学位分野・名称	博士(理学)に「 <u>霊長類学・ワイルドライフサイエンスプログラム修了</u> 」を付記		
7. 主要分科	(①) (②) (③) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入 基礎生物学、生物科学、人間情報学、人類学、環境創成学、動物生命科学、心理学、子ども学、科学教育・教育工学、地域研究、文化人類学、文化財科学・博物館学、政治学		
	(① 進化生物学) (② 生態・環境) (③ 認知科学) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入 生物物理学、動物生理・行動、植物分子・生理科学、自然人類学、自然共生システム、獣医学、統合動物科学、実験心理学、子ども学、科学教育、地域研究、文化人類学・民俗学、文化財科学・博物館学、政治学、国際関係論		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	理学研究科生物科学専攻、 <u>霊長類研究所</u> 、 <u>野生動物研究センター</u>		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名			
該当なし			
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名			
該当なし			
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)			
該当なし			

14. プログラム担当者の構成 計 62 名					
外国人の人数		8 人	[12.9 %]	女性の人数	
				19 人 [30.6 %]	
プログラム実施大学に属する者の割合 [75.8 %]					
プログラム実施大学に属する者			47 人	プログラム実施大学以外に属する者	
そのうち、他大学等を経験したことのある者			30 人	そのうち、大学等以外に属する者	
				6 人	
15. プログラム担当者					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成31年度における役割)
(プログラム責任者) 北野 正雄	キタノ マサオ		理事(教育担当)、副学長	電磁波工学博士(工学)	プログラム責任者として学位プログラムの全体運営を遂行し、責任を持つ。
(プログラムコーディネーター) 松沢 哲郎	マツザワ テツロウ		高等研究院・特別教授	比較認知科学博士(理学)	プログラムコーディネーターとして学位プログラムの全体運営が円滑に進むよう、諸般の調整にあたる。
幸島 司郎	コウシマ シロウ		野生動物研究センター・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座) (H29.10.15センター長退任)	生態学・動物行動学博士(理学)	ワイルドライフサイエンス・リーダーとして博士教育カリキュラムに必要な諸般の調整にあたる。
山極 壽一	ヤマギワ ジュイチ		学長	人類進化論博士(理学)	保全生物学リーダーとしての役割とともに、自然人類学、霊長類学で人と野生動物の両方の見地から保全研究や政策について国際的な視野から教育にあたる。
阿形 清和	アガタ キヨカズ		基礎生物学研究所・所長/京都大学野生動物研究センター・特任教授 (H31.4.1所属変更)	発生生物学博士(理学)	本プログラムにおける教養科目リーダーとしての調整の役割とともに、ゲノムレベルでの生物多様性教育・実習を担当する。
中川 尚史	ナカガワ ナオフミ		理学研究科・生物科学専攻・教授	霊長類学博士(理学)	プログラムの分担者のひとりとして、生態学、保全生物学分野の教育を担当する。
古市 剛史	フルイチ タケシ		霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	霊長類学、自然人類学博士(理学)	プログラム担当者として、主として野外調査に基づく教育及び研究指導をおこなう。
湯本 貴和	ユモト タカカズ		霊長類研究所・所長・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	霊長類学・生態学博士(理学)	霊長類と森林に関する生態学的な観点から研究教育をおこなうとともに、生態系における動物の役割や人間社会との関係の探求からワイルドライフサイエンスの構築に寄与する。
岡本 宗裕	オカモト ムネヒロ		霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	獣医学博士(獣医学)	プログラム担当者として、獣医学特に野生動物医学に関する教育を担当する。
Huffman, Michael Alan	ハフマン マイケル アラン		霊長類研究所・准教授 理学研究科・生物科学専攻・准教授(協力講座)	行動生態学博士(理学)	プログラム担当者として、霊長類の行動生態学に係る教育及び研究指導をおこなう。
Bercovitch, Fred Bruce	ベルコビッチ フレッド ブルース		野生動物研究センター・特任教授	比較野生動物生物学 Ph.D.	国際的な研究機関で勤務した経験をもとに、国際社会で活躍できる研究者の育成を推進する。ネイティブとして英語での研究・教育を支援する。
Hill, David Anthony	ヒル デイビット アンソニー		野生動物研究センター・特任教授	社会生態学 Ph.D.	国際社会で活躍できる研究者の育成を推進する。また過去に数度渡日した経験により、日本人学生を考慮した学位プログラムの国際化に貢献し、またネイティブの英語を活かす。
平田 聡	ヒラタ サトシ		野生動物研究センター・教授	比較認知科学博士(理学)	分担者としての役割として、熊本サンクチュアリでの比較認知科学の実習を担当する。
足立 幾磨	アダチ イクマ		霊長類研究所・准教授	比較認知科学博士(文学)	国際共同先端研究センター所属教員として本プログラムとりまとめの役をするとともに、霊長類研究所での比較認知科学の実習を担当する。

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成31年度における役割)
橋本 千絵	ハシモト チエ		霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	霊長類学、自然人類学 博士(理学)	プログラム担当者として、主として野外調査にもとづく教育及び研究指導をおこなう。
江木 直子	エギ ナオコ		霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	古生物学、比較形態学 Ph.D(医学)	プログラム担当者として、霊長類学、古生物学の講義と実習を担当する。
宮部 貴子	ミヤベ タカコ		霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	獣医学、麻酔学 Ph.D(獣医学)	プログラム担当者として、獣医学、麻酔学に関する教育を担当する。
林 美里	ハヤシ ミサト		霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	比較認知発達 博士(理学)	本プログラムの担当者として、霊長類学、比較認知科学の講義と実習を担当する。
MacIntosh, Andrew James Jonathan	マッキントッシュ アンドリュー ジェームズ ジョナサン		霊長類研究所・准教授	行動生態学 博士(理学)	本プログラムの担当者として、外国人でありながら京都大学で博士学位を取得した経験をもとに、日本人学生を考慮した学位プログラムの国際化に貢献する。
伊谷 原一	イダニ ゲンイチ		野生動物研究センター・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	人類学・動物園科学 博士(理学)	本プログラムの副コーディネーターとして調整の役にあたるとともに、ワイルドライフサイエンスの専門家として、国際的な発信力をもつ実践者の育成をおこなう。
村山 美穂	ムラヤマ ミホ		野生動物研究センター・センター長・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座) (H29.10.16センター長就任)	動物遺伝学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、フィールドとラボをつなぐゲノム細胞研究・教育つうじて、野生動物の保全の実践において国際貢献できる人材を育成する。
中村 美知夫	ナカムラ ミチオ		理学研究科・准教授	人類学・霊長類学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、アフリカで絶滅危惧種の長期研究やその保全をおこなってきた経験を活かして、フィールドワークを主体的に実施できる人材の育成をおこなう。
杉浦 秀樹	スギウラ ヒデキ		野生動物研究センター・准教授 理学研究科・生物科学専攻・准教授(協力講座)	動物行動学・生態学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、保全生物学の立場から、野外でのフィールドワークの指導をおこなう。
山越 言	ヤマコシ ゲン		アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ地域研究専攻・教授 (H31.4.1職位変更)	地域研究・文化人類学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、ギニア共和国における長期的ワイルドライフサイエンス人材育成活動の実施にあたる。
松林 公蔵	マツバヤシ コウゾウ		東南アジア地域研究研究所・連携教授	フィールド医学、老年医学、神経内科学 博士(医学)	本プログラムの分担者として、フィールド(ブータン・ニューギニア)における高齢者ヘルスケア・デザインの構築を担当する。
明和 政子	ミヨウワ マサコ		教育学研究科・教育科学専攻・教授	発達科学・比較認知科学 博士(教育学)	本学位プログラムにおける人間科学における基礎教育の提供とフィールドでの応用実践。
坂本 龍太	サカモト リョウタ		東南アジア地域研究研究所・准教授	フィールド医学 博士(医学)	プログラム担当者としてブータン王国を対象とした指導者育成プログラムを担当する。
今井 啓雄	イマイ ヒロオ		霊長類研究所・教授 (H30.4.1職位変更)	ゲノム科学 博士(理学)	プログラム担当者としてゲノム科学とゲノム実習を担当する。
友永 雅己	トモナガ マサキ		霊長類研究所・教授	比較認知科学 博士(理学)	プログラム担当者として比較認知科学とチンパンジー認知実験実習を担当する。
森村 成樹	モリムラ ナルキ		野生動物研究センター・特定准教授	動物福祉学 博士(理学)	プログラム担当者として動物福祉学と環境エンリッチメント実習を担当する。
中村 美穂	ナカムラ ミホ		野生動物研究センター・客員准教授	動物映像学 理学士	プログラム担当者として動物映像学とその実習を担当する。

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成31年度における役割)
藤澤 道子	フジサワ ミチコ		東南アジア地域研究研究所・連携准教授	フィールド医学 博士(医学)	プログラム担当者としてフィールド医学の立場からのアフリカおよびブータンでの実習を担当する。
岸田 拓士	キシダ タクシ		野生動物研究センター・特定助教	進化ゲノム科学 博士(理学)	プログラム担当者として保全生物学のラボワークに関する教育に従事する。
服部 裕子	ハツトリ ユウコ		霊長類研究所・助教 (H30.1.1所属部局変更)	比較認知科学 博士(文学)	プログラム担当者として霊長類学、比較認知科学の講義と実習を担当する。
木下 こづえ	キノシタ コヅエ		野生動物研究センター・助教	保全繁殖学 ・博士(農学)	プログラム担当者として、動物の繁殖学に関わる研究および教育活動を遂行する。
狩野 文浩	カノウ フミヒロ		高等研究院・特定准教授 (H30.4.1所属部局・職位変更)	比較認知科学 ・博士(理学)	プログラム担当者として、学生の実験計画、実験器具取扱い、データ採取、データ分析、論文執筆などについて協力する。
山梨 裕美	ヤマナシ ユミ		京都市動物園・生き物学び研究センター・主席研究員 (H29.6.1所属変更)	動物福祉 ・博士(理学)	プログラム担当者として、動物が心も体も健康に生活できるような環境整備のために活躍する人材の育成を担当する。
早川 卓志	ハヤカワ タカシ		北海道大学大学院地球環境科学研究院・助教 (H31.4.1所属変更)	分子生態学、 比較集団ゲノミクス 博士(理学)	プログラム担当者として、保全遺伝学・分子生態学の基礎及び実践教育を担当するとともに、動物園・水族館・博物館との研究教育活動の連携や、試資料の収集・保存・管理に関する講義・実習をおこなう。
川上 文人	カワカミ フミト		中部大学人文学部・講師 (H30.4.1所属変更)	比較認知発達 科学 博士(学術)	プログラム担当者として動物園における研究教育活動の連携を推進し、プログラムの高大連携プロジェクトの指導にあたる。
ANDERSON, James Russell	アンダーソン ジェームズ ラッセル		文学研究科行動文化学専攻・教授	比較心理学 Ph.D (Psychology)	プログラム担当者として、ネイティブ英語での研究・教育を支援し、幅広い視点を養う英語によるセミナーを実施する。
毛利 衛	モウリ マモル		日本科学未来館・館長 野生動物研究センター・特任教授	科学コミュニ ケーション 博士(理学)	本プログラムの分担者として、科学教育(科学的な論理思考と科学コミュニケーション能力を持つ人材の育成)を担当する。
西田 睦	ニシダ ムツミ		琉球大学・学長 野生動物研究センター・特任教授 (H31.4.1職位変更)	水域生物学・ 進化生物学 農学博士	本プログラム担当者として、主として水圏生物学、進化生物学・保全遺伝学の分野の面から、本プログラムの推進に参画する。
田中 正之	タナカ マサユキ		京都市動物園・生き物学び研究センター長(野生動物研究センター・特任教授)	比較認知科学・動物園学 博士(理学)	本プログラム担当者として、野生動物保全における動物園の役割についての教育、および動物園を舞台にした実践者の育成を担当する。

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成31年度における役割)
星川 茂一	ホシカワ シゲカズ		前 京都市副市長 野生動物研究センター・特任教授	地方行財政学 学士(法学)	本プログラム担当者として、自治体行政に携わった者の立場から当学位プログラムの内容充実に貢献する。
堀江 正彦	ホリエ マサヒコ		明治大学研究・知財戦略機構・特任教授、前 駐マレーシア特命全權大使・地球環境問題担当大使 野生動物研究センター・特任教授	地球環境問題 修士(経済学)	本プログラム担当者として、外務省での大使としての経験を活かし、学問を実践に活かす人材の育成を支援する。
山本 真也	ヤマモト シンヤ		高等研究院・准教授／野生動物研究センター・特任准教授 (H29.10.1所属変更)	比較認知科学 博士(理学)	プログラム担当者としてチンパンジー属2種の比較認知科学とその実習を担当する。
杉山 茂	スギヤマ シゲル		静岡大学工学部・准教授 野生動物研究センター・特任准教授	アメリカ思想史 Ph.D.	プログラム担当者として笹ヶ峰サバイバル実習を担当する。
青木 秀樹	アオキ ヒデキ		お茶の水総合法律事務所・弁護士 野生動物研究センター・特任教授	原子力行政論 学士(法学)	プログラム担当者として原子力行政論の講義を担当する。
松田 一希	マツダ イッキ		中部大学中部高等学術研究所・准教授／野生動物研究センター・特任准教授	霊長類生態学 博士(理学)	プログラム担当者としてボルネオ霊長類の生態とフィールド実習を担当する。
齋藤 亜矢	サイトウ アヤ		京都造形芸術大学文明哲学研究所・准教授／野生動物研究センター・特任准教授	比較認知科学・芸術論 博士(美術)	プログラム担当者として比較認知科学からみた芸術論の講義と実習を担当する。
大橋 岳	オオハシ ガク		中部大学人文学部・講師／野生動物研究センター・特任講師	霊長類学 修士(理学)	プログラム分担者として、野生動物の生態および保全について研究をおこない博物館や動物園・水族館などとの連携を深める人材の育成にあたる。
河合 江理子 (H31. 4. 1追加)	カワイ エリコ		総合生存学館・教授	グローバルコミュニケーション・ 修士(経営学)	プログラム担当者として、複雑化する国際社会のなかで、日本のために議論できる人材を養成する。
積山 薫 (H31. 4. 1追加)	セキヤマ カオル		総合生存学館・教授	心理学・脳科学 博士(文学)	プログラム担当者として、心理学と認知神経科学(MRIなど)の手法を用いた研究の指導をおこなう。
福島 誠子 (H30. 4. 1追加)	フクシマ セイコ		野生動物研究センター・特定助教	環境行政・ 修士(農学)	プログラム担当者として、環境省の自然系職員としての経験を活かし、環境行政で活躍できる人材育成をおこなう。
YU Lira (H30. 4. 1追加)	ユ リラ		野生動物研究センター・特定助教	比較認知科学・発達科学・ 博士(理学)	外国人でありながら京都大学で博士学位を取得した経験をもとに、プログラム担当者として日本人学生を考慮した学位プログラムの国際化に貢献する。
新宅 勇太 (H30. 4. 1追加)	シンタク ユウタ		野生動物研究センター・特定助教	動物園科学・ 博士(理学)	動物園キュレーターの経験を活かし、履修生の博物館・動物園における活動実践ならびにアウトリーチ活動の指導とサポートをおこなう。
Lucie RIGAILL (H31. 4. 1追加)	ルーシー リゲイル		霊長類研究所・特定助教	霊長類学・行動生態学・ 博士(理学)	外国人でありながら京都大学で博士学位を取得した経験をもとに、プログラム担当者として日本人学生を考慮した学位プログラムの国際化に貢献する。
富谷 進 (H31. 4. 1追加)	トミヤ ススム		霊長類研究所・特定助教	古脊椎動物学、哺乳類の進化と多様性・ 博士(地球惑星科学) (統合生物学)	海外の博物館で研究員として資料管理・研究・教育活動に携わった経験を活かして、国際的な視野を持ったキュレーターや研究教育者を養成するとともに、「野生動物学」の幅広い概念の下で、既存の分野の枠にとらわれない学際的な研究を推進する。
リングホーフアー萌奈美 (H30. 4. 1追加)	リングホーフアー モナミ		高等研究院・特定助教	動物行動学・ 博士(学術)	プログラム担当者としてウマの行動学や比較認知科学とその実習を担当する。
河合 美宏 (H31. 4. 1追加)	カワイ ヨシヒロ		野生動物研究センター・特任教授	グローバルコミュニケーション・ 博士(金融規制、保険理論)	プログラム担当者として、複雑化する国際社会のなかで、日本のために議論できる人材を養成する。
HAN Ning (H31. 4. 1追加)	ハン ニン		野生動物研究センター・特任教授	グローバルコミュニケーション・ 修士(英語英文学)	霊長類学・ワイルドライフサイエンスを人文社会学の側面から支え、英語・中国語・日本語による指導をおこなう。
牛田 一成 (H30. 4. 1追加)	ウシダ カズナリ		中部大学創発学術院・教授	動物生理学・腸内細菌学・ 博士(農学)	プログラム分担者として、野生動物の腸内細菌の研究を通じて、宿主と腸内細菌の共進化機構を解明し、野生動物の生態および保全につながる教育を担当する。

16. プログラムの応募学生数、合格者数及び履修生数

本プログラムの過去のリーディングプログラム応募学生数等について記入してください。

(各年度3月31日現在(ただし平成31年度は提出日現在))

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度 (2019) *(今後の募集予定: 有)	
プログラム募集定員数	—	5人	5人	5人	5人	5人	5人	
① 応募 学生 数	—	12人	17人	19人	9人	17人	9人	
	うち留学生数	—	2人	6人	7人	4人	9人	
	うち自大学出身者数	— (—)	2人 (0人)	2人 (0人)	5人 (0人)	2人 (0人)	3人 (0人)	3人 (0人)
	うち他大学出身者数	— (—)	10人 (2人)	15人 (6人)	14人 (7人)	7人 (4人)	14人 (9人)	6人 (4人)
	うち社会人学生数	— (—)	2人 (1人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)
	うち女性数	— (—)	7人 (2人)	14人 (5人)	7人 (1人)	6人 (4人)	10人 (5人)	5人 (2人)
② 合格 者数	—	9人	11人	12人	9人	7人	6人	
	うち留学生数	—	2人	5人	5人	4人	4人	2人
	うち自大学出身者数	— (—)	2人 (0人)	2人 (0人)	3人 (0人)	2人 (0人)	1人 (0人)	3人 (0人)
	うち他大学出身者数	— (—)	7人 (2人)	9人 (5人)	9人 (5人)	7人 (4人)	6人 (4人)	3人 (2人)
	うち社会人学生数	— (—)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)
	うち女性数	— (—)	6人 (2人)	9人 (4人)	5人 (1人)	6人 (4人)	6人 (4人)	4人 (1人)
③ ②の うち 履修 生数	—	9人	11人	12人	9人	7人	6人	
	うち留学生数	—	2人	5人	5人	4人	4人	2人
	うち自大学出身者数	— (—)	2人 (0人)	2人 (0人)	3人 (0人)	2人 (0人)	1人 (0人)	3人 (0人)
	うち他大学出身者数	— (—)	7人 (2人)	9人 (5人)	9人 (5人)	7人 (4人)	6人 (4人)	3人 (2人)
	うち社会人学生数	— (—)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)	0人 (0人)
	うち女性数	— (—)	6人 (2人)	9人 (4人)	5人 (1人)	6人 (4人)	6人 (4人)	4人 (1人)
プログラム合格倍率 (応募学生数/合格者数) (小数点第三位を四捨五入)	—	1.33倍	1.55倍	1.58倍	1.00倍	2.43倍	1.50倍	
充足率 (合格者数/募集定員)	—	180%	220%	240%	180%	140%	120%	

※留学生については、「うち留学生数」にカウントするとともに、うち自大学出身者数、うち他大学出身者数、うち社会人学生数、うち女性数の()に内数を記入してください。

※平成31年度*(今後の募集予定:有・無)については、平成31年度内に履修を開始する学生を募集予定の場合(秋入学等)は「有」に、募集予定がない場合は「無」に印を付けてください。

また、「有」の場合は、当該予定分については表中には含めず、備考欄へ募集時期及び募集予定人数を記入してください。

※編入学生がいる場合は、年度ごとの内訳を備考欄に記入してください。

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

【概要】 霊長類学は日本発の、そして日本が世界を牽引する稀有な学問であり、近年、霊長類学を基盤にし、大型の絶滅危惧種を対象にした「ワイルドライフサイエンス」という新興の学問分野が確立されつつある。そこで必要とされているのは、フィールドワークを基盤として、人間のこころ・からだ・くらし・ゲノムを包括的に理解しつつ、「地球社会の調和ある共存」を目指す実践活動である。学問としては最先端を担っているが、欧米にあって日本に明確に欠けているものが3つある。①生物保全の専門家として国連や国際機関・国際NGO等で働く若手人材、②博物館・動物園・水族館等におけるキュレーター、および、生息地で展開する博物館動物園としての「フィールドミュージアム」構想の具現者、③長い歳月をかけて一国を対象としたアウトリーチ活動を担う実践者、である。これら日本が抱える3つの欠陥を逆に伸びしろと考える。研究・教育・実践の新たな展開の場と捉え、学問と実践をつなぐグローバルリーダーの育成を目指す。本プログラムで修養を積んだ人材は、高度な専門的知識を有するとともに、現場でのニーズを素早く把握し、問題を解決する能力を有しており、産業界においても貴重な戦力として期待できる。

【特色および優位性】 本プログラムでは、霊長類学の蓄積を活かし、以下3点を重点施策に据え、ワイルドライフサイエンスの広い分野で博士学位を持ち国際性を身につけたグローバルリーダーを育成する。

1. 絶滅危惧種をシンボルとした生態系の保全を担う国際機関ならびに NGO 組織で職員や指導者として活躍できる人材の育成

日本は国際連合 (UN) の主要なドナー国でありながら、職員数は著しく少ない。これは専門性と、語学力・情報発信力、フィールドワークの現場経験をあわせもった人材が不足しているためだと考えられる。そこで、本プログラムを通じ、現場経験をもち博士学位を有するフィールドワーカーを育成し、国連を含む国際機関、国際的 NGO 等で中心となって働く人材を養成することが、国際社会の一員としての日本の急務と考える。幸い、霊長類学とワイルドライフサイエンスについて日本学術振興会の先端研究拠点事業等で日独米英仏伊の先進6か国連携体制を確立し、生息地の主要研究機関とも覚書を通じた連携体制を構築してきた。それらをもとに、研究者ではなく国際的実践者の人材育成を目指す。

2. 博物館・動物園・水族館・教育現場等において主事の役割を果たす指導者の育成

欧米ではリサーチフェローやキュレーター等の職が確立していて、博士学位をもった人材が、研究と教育を両立させつつ動物園・水族館等の運営等に深く関わっている一方、日本では人間とそれ以外の動物との調和ある共存について学問と実践を統合する人材が乏しい。本プログラムにより、絶滅危惧種保護のための国際連携にも貢献できるような国際的情報発信とコミュニケーションを園館で担う主事の役割を果たす人材を育成する。本学はすでに京都市動物園をはじめ園館との連携締結を進めており、本プログラムで狙う人材教育の基盤はできつつある。法令によって定められた博物館の学芸員資格だけではなく、真に科学を学んだものが博物館での活動を通じて、科学的研究成果を一般に伝えることができるようにしたい。その先に、国内外の生息地そのもので展開する新しい博物館動物園のかたちである「フィールドミュージアム」の実現を目指す。

3. 一国を対象としたアウトリーチ活動を担えるオールラウンドな指導者の育成

京都大学は、1957年にはじまったブータンとの交流に見られるように、全学を挙げて1国を対象としたアウトリーチ活動をおこなってきた。こうした活動を支えるのは、総合大学ならではの文化・教育・宗教・防災・生物・農業・環境等に関する広範な協力体制である。京都大学はこの点においても秀でている。本プログラムでは、ゲノム科学から行動学や生態学までフィールドワークを基本とした手法で、アマゾン(ブラジル)等生物多様性のホットスポットにおける保全活動を通じて、一国まるごとを対象としたアウトリーチ活動を担うオールラウンドな指導者の育成を目指す。活動実施予定の国や地域との連携体制は既に整っている。

上記の施策のため、以下の3点を軸に教育をおこなう。

- ① **フィールドワーク実習**: 京大が保有する国内の野外実習拠点を活用する。天然記念物の幸島での野生ニホンザルの生態観察、世界自然遺産の屋久島でのヤクザルとシカの共存する森でのゲノム実習、妙高高原京大ヒュッテを拠点とした野外生活・観察実習等に、自主企画運営の短期野外研究を加えた8つの野外実習を1-2年次の必修とする。3年次以降は、国内外連携拠点でフィールドワーク実習をおこなう。
- ② **国際連携機関との交流**: 各年次で義務付ける。平成16年度の先端研究拠点事業に始まって13年続く日独米英仏伊の先進6か国の連携に加えて、生息地国の主要研究機関との覚書も整っている。いずれかの場所を中継基地として、海外実習を実践する。
- ③ **国内実験施設での実習**: 京大が保有する研究施設: 霊長類研究所、野生動物研究センター、リサーチリソースステーション(RRS)、幸島観察所、熊本サンクチュアリや、学外連携施設: 京都市動物園、京都水族館、名古屋市東山動物園、日本モンキーセンター等を活用する。ラボワークを通して、こころ・からだ・くらし・ゲノムの広い視野から人間とそれ以外の動物の関係を学ぶ。

入学試験は英語でおこない、春秋入学を認める。すでに平成21年度に霊長類研究所国際共同先端研究センターを立ち上げ、グローバル30プログラムに沿って外国人留学生を対象に独立の大学院入試・教育・学位授与をおこなってきた。そのノウハウと蓄積を日本人学生にも活かして、入り口から出口まで一貫した展望で国際性をもった運営をする。

プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)

霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院(PWS)



プログラムの成果

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成するという観点に照らし、学生や修了者の活躍状況を含め、アピールできる成果について記入してください。)

フィールドワークを基盤として、人間のこころ・からだ・くらし・ゲノムといった本性全体の理解を深めつつ、「地球社会の調和ある共存」に向けて学問と実践をつなぐグローバルリーダーを育成した。

【NGO “Marine Animal Research and Conservation”】履修生 KIM Mi Yeon が共同設立者となり、NGO「Marine Animal Research and Conservation」を発足させた。海洋生物との調和ある共存を目的に、生態保全のグローバルリーダーとして組織運営の現場経験を積んでいる。

【受賞・奨学金多数】京都大学では、学業・課外活動・社会貢献活動等において顕著な活躍をし、大学の名誉を高めた学生および学生団体を対象とした学生表彰制度「京都大学総長賞」を設けている。平成 30 年度の京都大学総長賞を、履修生の GAO Jie が受賞した。また、京都大学における若手の女性研究者の優れた成果を讃える制度として、学術上優れた研究成果を挙げた若手の女性研究者を顕彰する第 11 回京都大学優秀女性研究者奨励賞（学生部門）

を、修了生の齋藤美保が受賞した。ほかに「KOUDOU2017（日本動物行動関連学会・研究会 合同大会）最優秀発表賞（GAO Jie）」「第 6 回京都大学学際研究着想コンテスト 2018 奨励賞（徐沈文）」「日本動物心理学会第 78 回大会優秀発表賞（川口ゆり）」「2017 年度笹川科学研究奨励賞（横塚彩）」「霊長類学の国際英文誌 *Primates* の 2018 Social Impact Award (Sayuri TAKESHITA) (GAO Jie)」「2017 Franklin Mosher Baldwin Memorial Fellowship (Himani NAUTIYAL)」など、多数の履修生・修了生が各界の受賞・奨学金を勝ち取っている。プログラム履修生に占める日本学術振興会 DC1・DC2・国費留学生の割合は、当初の 10%から 48%に激増した。博士課程以上に限れば、その割合は 70%にのぼる。

【Conserv' Session】履修生の自主企画 Conserv' Session では、生態保全にかかる意識の向上を目的として、動物保護活動に関するドキュメンタリー上映・情報交換・オープンディスカッションを実施している。これは広く学内外を対象に、参加・視聴自由として月次で開催して、2019 年 6 月に第 26 回目を迎える。企画・運営スタッフとして参加している学生は、リーディング参画研究科・専攻等を超えて拡大していて、自主性やリーダーシップが現場で涵養されている。

【アウトリーチ】履修生を運営主体として、動物園や一般企業、地方自治体と連携したアウトリーチ活動を多数実施している。公益財団法人日本モンキーセンター（犬山市）では、「京大モンキー日曜サロン」と題して、一般の来園者向けに研究内容をわかりやすく伝える講演を履修生が継続している。また、同センター発行の雑誌「モンキー」では、履修生や修了生が毎号、連載を担当している。東京国際フォーラム主催、(株)ウインズ・インターナショナル企画制作協力の「丸の内キッズ・ジャンボリー」では、こどもにフィールドワークの魅力伝えるアウトリーチ活動を、履修生の企画・運営で H26 年から連続して毎年 8 月に実施している。同様の取り組みは、松本市山岳観光課の協力を得て松本市（H29.11.26-27）でも実施した。



プログラムの成果

(大学院改革につながる教育研究組織の再編等の学内外への波及効果や課題の発見について記入してください。)

【プログラムの必修実習＝研究科正式科目】プログラムの必修8実習（インターラボ・幸島実習・屋久島実習・ゲノム実習・笹ヶ峰実習・比較認知科学実習・動物福祉実習・動物園博物館実習）を、理学研究科の正式科目として実施し、履修生以外もワイルドライフサイエンスの知見を習得できた。

【教育研究組織の再編・連携】京都大学における「学域・学系」再編の取組により、プログラムを構成する主要部局である霊長類研究所と野生動物研究センターが、「霊長類野生動物学系」としてひとつになった。霊長類研究をきっかけとして多様な野生動物の研究を展開し、「野外研究と実験研究を融合させるといふ日本独自の手法」の確立を通じて、「ワイルドライフサイエンス」と呼べる新たな学問が構築されてきたのだが、その成果が組織再編という形で結実した。これに高等研究院、学術情報メディアセンターなどが協力することによって、野生動物の生態・行動・認知研究等に工学的・情報学的なイノベーションを起こせるだろう。このネットワーク内で相補的取組との協働も見込まれ、実践学問「ワイルドライフサイエンス」が、発展的とけこみの形で、支援期間終了後も受け継がれる。

【大学院改革に向けた全学的体制の確立】2018年4月に**大学院横断教育プログラム推進センター**が設置され、総長をトップとした全学的なマネジメント体制が整った。博士課程教育リーディングプログラムおよび卓越大学院プログラムなど、研究科を横断する学位記付記型の大学院教育プログラムを全学的に総括、運営し、大学院改革を先行実施する拠点として、その成果を本学の大学院教育全体に浸透させている。大学院横断教育プログラムの運営に関する重要事項を審議・決定する大学院横断教育プログラム運営協議会には、各研究科長も構成メンバーに加わり、教育プログラムの実施、継続、発展に向けた責任の共有と、プログラムに対する学内協力体制が構築されている。また運営協議会の下におかれた大学院横断教育プログラム運営委員会には、各プログラム・コーディネーターに加えて教育制度委員会委員などが複数参加し、プログラム関係者以外の外部的視点から、教育プログラムの質保証をはじめとする実施内容の企画、検証、評価（PDCA）をおこなっている。プログラム履修者の学修記録を可視化し、教育エビデンスを一元管理できる **Student Educational Profile システム(STEP)** の導入はその一例で、大学院教育における学修支援ツールとして大学全体に波及している。

【On-site Laboratory】本プログラムの基盤はグローバルなフィールドワークだが、これと合致した取組として、京都大学が **On-site Laboratory** 事業を制度化した。**On-site Laboratory** は、海外の大学や研究機関等と共同で設置する現地運営型研究室で、海外機関等と活発な研究交流をおこない、世界をリードする最先端研究を推進する。あわせて優秀な外国人留学生の獲得、産業界との連携の強化など、グローバルなフィールド基盤・体制の強化に全学で取り組む。

【学際的な『ワイルドライフサイエンス』評価・支援基盤の確立】日本学術会議・基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同ワイルドライフサイエンス分科会において、プログラム・コーディネーターが委員長を務め大型研究計画のマスタープラン 2020 を創り、長期的かつ学際的な評価・支援基盤を固めた。

【今後の課題】大学院教育の抜本的改革に向けた課題としては、実践者の育成の「継続」が挙げられる。本プログラムは、京都大学らしいオンリーワンのプログラムであり、フィールドワークという野外研究の伝統に根ざしている。学問の世界で、まちがいなく霊長類学は世界の第一線にある。一方で、保全という実践活動の面では、欧米に比してまだ劣っている。国連や国際的 NGO で働く人材は乏しく、世界動物園協会でも存在感が薄い。つまり、研究が研究にとどまっただけで、現実の世界を直接変えるまでの力になっていない。そうした観点から、研究が教育であり、教育が社会貢献に即決するようにデザインされたのが本プログラムである。本プログラムの学内外における大学院教育全体への波及効果としては、本学が **WINDOW** 構想で「Wild & Wise」と掲げる通り、大学院教育をさらに実践的で行動的な方向へと誘導するという効果があった。学内だけでなく、学外的にも、あてはまる波及効果である。出口となる産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを支援期間終了後も継続し、発展させる。